あるべし子三郎りん思やう這金ゆけゆく行德ゆ八幡宮の
神主が落しるを疑ひあり斯高金と失ひあぐ極て難義
あるべし如じ今らう彼死ゆけると行ふ神主を訪ね這
金返し子んみちと夫らう終夜陸地とゑるを夜半行德の
わたりを渡り是彼の家とうちおとうてかの八幡宮何の八幡とも云しれず忘
るゆ生幼年のゑを聞るの社とゑひ聞神主の家ゆ尋ねいらう門
事ゑゑ殊の外送忘あり
うち敲ゑくゑべ裡ゑう一人の下僕門とひらゆて誰と問子三郎
りん神主ゆ見えるゆ此よりとりべ下僕ゑゑへゑ我主人ひさしく
大病ゆ犯ゑを命旦夕ゆ迫ゑう逢るふも言語さえゆ分解を
かねべるふ子三郎りん然ど内室ゆ見え待りんるふ是らう

下僕子三郎りんを倡引て裡ゆいりかゑと告る神主が妻いでゑ子
三郎りんゆ對面ゆ子三郎りん色袱を把いべるて入りし夏
ど仔細ゑるう神主が妻ゆ返し子ゑゑべ妻ゑ悟びおし
いべゑ涙と流て稟やう這金ゆ名ゆ夫が當今の大病あり元
ゆの八幡の社ゑ氏子りあゑ貧地ゆゑ二三十年來大破ゆ及
再建ゑべ方便もあるべしと當の夫來ゑゑより以來近郷
ゑゑ江戸中と跪あるれ幸ていさゑう講人とゑう五五
六年があひだ千幸万苦して漸々百金ゆ満さゆら這五十日
あはう響の日江戸の構元の家ゆゑあの金と請ゑう飯ゆ
過ちて不計川の中ゆゑう落しぬ夜の船あるべ知ゑゑ次の

日より許妻は人夫とやゝひ三日ゞ間〳〵ゞゞ侍〳〵ゞも竟ゝ知れ
詮方なく〳〵て家ゝ飯ゞ夫より斯る病とあり命今とも計ゞ〳〵
候ゝ然るに這金を拾ひ〳〵遂〳〵給る事寔ゝ神の導合
せのよあるべ〳〵且夫ゝ見ず〳〵憘ゞ侍るんと与三郎と
倡引て夫の病床ゝ〳〵るり枕頭ゝ顔さ〳〵よせ這度とゝるり
彼金のつゝを看せ〳〵神主見と聞てもづるゝ眼とひらき
妻ゝ介らまてやり〳〵ゝ起返り困苦あるゝ与三郎と三
拝〳〵彼色袱と手ゝ〳〵るりてゆ〳〵いゝぎハ有難〳〵と云
〳〵る侭つひゝ空〳〵あるゝ妻も下僕も大いゝ忙慌かり
ありけさるゞ〳〵薬を用ひゝもゞ効あ〳〵近隣の人荘官們

集てきゝ〳〵其一日を〳〵て竟ゝ葬禮を執行るり与三商
門ゝ飯ゞもやゝ四五日這家ゝ逗留し彼見ゝ〳〵働き〳〵
ゝ由縁の人ゝ〳〵あり一日荘官何ゞ〳〵与三郎んゝ向ひて
云やゝ宴ゝ足下ゝ古の家ゝ恩人ゝ〳〵妻子もあ〳〵と聞およひ
ぬ万望ゝ今よりゝ這家ゝ〳〵ゝ神主とあ〳〵せ給んやと云
〳〵るゞ与三郎ん驚て我〳〵ゝ六借を役ゝで死侍るゞと當
座より直ゝ江戸へ逃返るる湯島三組町ゝ与三郎ん這四
五日家ゝ飯ゞといゝ〳〵ゝ事平生の度あり〳〵ゝ近隣の人
何と怪むゝ〳〵ゝ与三郎ん帰ても這彼をかゝ〳〵ざ
〳〵ゞ誰知ゝものをあるゝ〳〵ゝ宴ゝ天ゝ口あ〳〵人と坎て云

くむると這事誰いふやあく〜ろう沙汰して世間ふかくも
あくるるおぞいろしう止事あれ御許ふも聞えんやうて宣れ
て御紙の上宣うくふべきよう有るまじう与三郎殿殘
老むつ〜れ夏と知侍うば願くも御免下さるべしとうう否く
別ふ六借夏あ〜你ぐ心のまくふ何ありとも勤べしとあるく
竟ふ小石川辺の御官第へ御抱ふあるふ与三郎元来氏
素性も志もぬ者あるるもぶ住居〜ふる町の名と氏う

三組町与三郎今猶その子孫殘るもぐ

○谷風梶之助

谷風も生國奥州宮城野霞目村の農家の子あり寛保三

庚午年八月八日ニ産る幼名を四郎や呼ぶ幼稚乃時
より角抵をこのみ十九歳ゟ初て秀の山と号り後伊達の
関森ゑりんと呼ぶ八年の間三都中ゟ組合二百二十番
這中ゟ十一番負あり外ニ頭取預ゑ或ゟ勝負
等廿七番あり勝角觝百八十三番ゟ聞える安永五年
廿七歳谷風梶之助と改名を背の高さ六尺身の重さ四十三貫目
安永酉年本朝角抵の總行司吉田追風のお家より土俵入横綱の
護勝とゆるさる天明元辛丑年二月大坂難波新地の角抵場ニ人カ
ゞ初日ゟ並松巻の戸岩ゞ谷柏木初瀬川ゟの五人ニ這方ゟ谷風
一人ゟ毎日斯の如く十日ニ五十人の相手ゟ一番も負なく

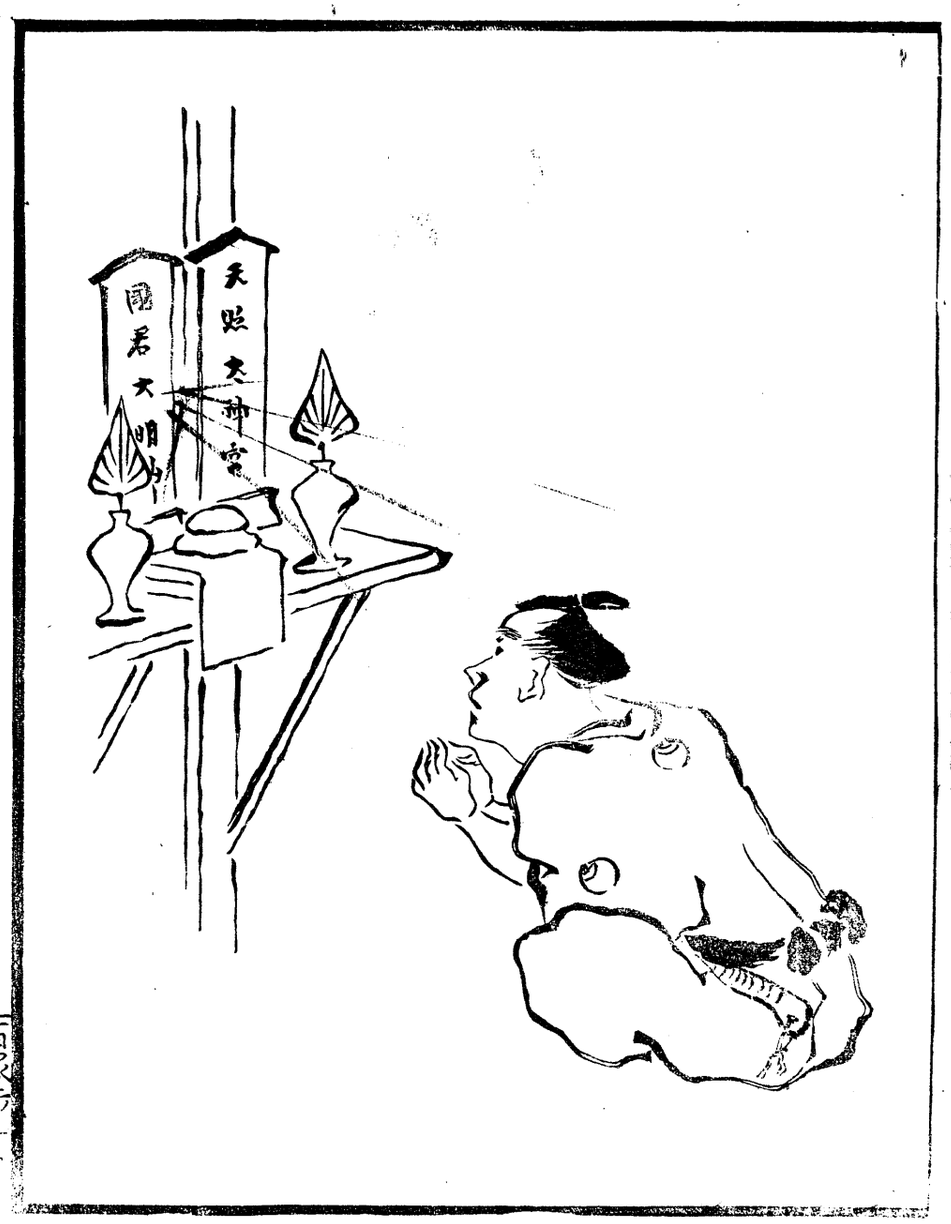
宴ニ寄代の看物あり〳〵ゟ寛政七乙卯年正月九日四十六歳
ゟ〳〵ゟ法名釋性谷響了風仙府江戸高輪東漸寺の碑
銘ニ委〳〵ゟ見ゑ羨ニ畧ス

○御師匠良助

東武三田某侯御やしき内下隷子舎ニ良助と〳〵者ゟ
ゟ匹夫ニ手跡もゟ〳〵能書ゟ千
隷ゟ法ゟ〳〵何ぞ知ざる淳ゟ這良助ニ〳〵
一度〳〵て答ぶとゟ事ゟ〳〵這ゟ名ニ綽号〳〵て御師
匠と呼ぶゟ此ゟ殊ニ異物ゟ〳〵朝ゟ他ゟ向へ起夜ゟ
人ゟ遅く森部屋ゟ裡の事何ゟ〳〵當身一人ゟ働

きそろら掃除〜水うち清らふあ〜竈下の飯炊おと
も一人〜〜焚〜〜つらく諸方の使おぜも皆一人ゐ〜〜領取て
かけまろう人の做べき事とのそらぶ勤る然〜て人〜ろう
些少も酬謝とうるふあ〜ぶ藩中ぐ〜ろう市中へ使おぐと
史ろ〜事あとべ早速ふは〜〜て行ふど衆人ひ〜ら這良
助と愛〜〜ろう子舎のかく隅ふき架とかなへおゐ其上ふ
伊勢両皇太神宮まる國君の尊名とまる〜ゐて亘暮ふ是
と拜〜燈明とて〜〜鏡餅おど備るふど外るの下隷
等も止事お〜是ふ拜ろうて拜まるも有〜とど此良助
つひふ角觝とものむ癖あり春秋の大角抵へさらあり諸死

の苍角觝ゆ〜〜諸社の祭禮とるふふ〜も角力とぐふ闘〜ゐ
ら往て看ざる處あ〜平生ふ部屋の事ども一人ふ〜働ゐ
ゐ〜換ふら角觝ぐふ有〜ゐ十日の角抵十日あ〜ろう
闘支お〜看物ふ行ると下隷おろも角抵の間〜ら良助の
あゐぐふと事と残お〜〜ろ〜〜勤ゆ〜支あり都て二十
餘年ぐあひぐ那里の角抵ふ〜も残らぶ眼的〜〜ろる
最記憶ろ〜〜〜年嚮いづこの角力何の月の幾日ら誰や
かやろの勝あ〜〜ゆ〜何の日ゆとるひふ斯々の支あり
ゆあぐ〜仔細おぐえ居て人ふ語る藩中ぐ〜ふも角力癖の
人々ゆとり〜〜這良助とゆびて昔の角抵の話とせさせて



聞ふ當眼頭ふ見るで〳〵ゆの〳〵る〳〵談話ふでいよ〳〵大ふ愛らもろう一時本死回向院の秋角抵ふ良助初日よりの歌夏なく看物ふゆれるふ一日木戸口ふ〳〵角力の頭取何ど〳〵良助を呼ぶぐわ足下ちいづこの人ゝ知ねいも二十餘年ゝのかくふづもの角抵場ふくも足下の顔を看ざる夏一日もあ〳〵船のまろうれ質素ゆるふ合してい関銭あども快よ〳〵払ゝ我今ゆまで你のでゝれ角力好の人と見ば抑いづこ住ゝ人ぞと問ゝもば良助ゝゝ賤夫ハ三田万字侯の御やゝれふ住ゆる下隷良助とまろう者ありと云ゝもば頭取渠ど身の上を聞こいよ〳〵ゆでゝれ丑感じ個ゝとかゝゝひ合せ夏ふ寄ゝき

人多くて這右衛門に関銭多くに看物を来るべくと
見ようして那里の角觝場みくも此良助が関銭とべくこざ
アくとぞ御藩中ふ由井何ぐ〳〵少い人殊ふ良助と見有
ふせくと見彼と執まるひ竟ふ侍分ふとう立らとくとで
荒磯といくる角觝夫弟が友人の許ふく物ぐくく仔爰ふ
ちくれ

○辰巳屋の老爺

江戸小石川傳通院前表町角ふ辰巳屋總兵衛といふ者有そう
見やくく一個の碁人みくいくあき頃より躍とものくくるが同
町畳やうもんといくる者の方へ丁稚給事ふ由紀昏の程ち主

家の要ふけらいもって何度も做ば夜ふいりて初更ちぐる頃
主家夫婦も卧房ふいりその躬も二階ふのぼりて卧少時あくて
再び起いでくひく舞とくくて楽ちくり半夜のころ二階みく
何やらん足音頻ちに聞えるるがで主人大いふ出ぐらき頻く
二階へのぼり看で彼丁稚ひくの踊て居ちくり主人大いふ叱ぐ
漸々止る爰の頃あぐれ日ふ餘の人ち昏寐をくるふ這丁稚幼名を
のくくち昏寐もせぐ帑庫の裡或ち納屋あぐにいりく汗と流
くと踊ちくくくる間ちの親族ちれば竟ふ我家ふ飯ち
然くとちくり後ハ汚もく踊て壮年ふ至てその舞の手も上達
くかくと爰ち神社の祭祀ふゆとハもくく出て踊るが殊ち

評判よろしつきてまつり祭禮好の癖を洩〳〵諸方の洩つり
ゐ出るゐ山王神田ちいつもさつゐり赤城明神氷川鮭野深
川八幡牛込御前いつもふもあと祭祀とぐゐ有と紀ち往
てそぐ〳〵ね處も多〳〵其踊ゐそぐ〳〵へ娘形のかづつと著く
黒木綿のゆり袖ゐ裾ゐゆつを染させ小き日傘を手ふりつ
薩广芋多ど食多ぐ〳〵踊ゐり六十過てゐりち馬ゐ乘ゆゐり
娘の装立ゐ〳〵皺顔ふ丑〳〵ろへとゆり最もそ〳〵くをぐゐる
ゐぐ偖ち辰巳屋の老爺ようを人ゐ多競て見と見る宝暦年中
より文政のそぐめ洩ぐ六十年あゐり一日も病多く諸社の祭
祀とゐゐ〳〵ゐゆ〳〵て暮ゐる娘一人あり見ゐ聟をえらぶふ容

兒へ醜しとも苦うしく舞をどりは上手を好みとて尋ぬる
しかぞ文政四年十月廿八日八十九歳にて死去ス近辺の若者
ども集ひて葬礼の轎を神輿のごとくしらん三面ハ鏡とうけ
擡の葉と榊のごとくしたひ唐人笛ふえ太鼓とかしし大勢
をどりまひて彼轎をかづけ小石川三百阪慈照院といふる寺へ
家ゝ太近くもぶ外道より廻りて祭祀のくゆ寺へ
ゝゝ外人ゝ斯様の事あるべ公聽より大いに
御咎も有べく寺ハも是を受べくば然と故障あるべ葬
式ゝのひしゝ宴ハ愛ゝ支ゝ今ハ慈照院境内ハ八
旬有餘の老人娘ゝ黒きゝ袖を著て舞のうちと

石ハ彫ゝる墓ゝゝの中ゝ最ゝゝき老爺ゝゝ

○車海老の老爺

本銀町三町目魚屋の親父ハ祭礼好ゝゝ毎年の祭
礼ハも這ハやぶ出ざる事ゝ大拍子といふる太鼓を敲
てうゝ其ゝる黒紀木綿ハ車海老と赤ゝ染ゝる衣服を著
るゝゝも換る事ゝ是ハとうて車海老の老爺とのく
云ゝ時代辰巳屋と大やうおゝ

○富士行者藤四郎

駒込高田の町ハ藤四郎と云ゝ者ありて殊ハ富士山を信心
七十五度登山ゝゝゝゝ青山若松町といふる處ハ

伊勢屋弥市と云へるもの是より富士信仰を宣暦より寛
政の始まで八十三度登山し富士の麓下浅間の社ふ弥
市が建立の鐵仏あり文化のころ九十三ヨリ終る四谷竜
昇寺といへるふ葬に高田の藤四郎と弥市ふ増アラ躬の
行ひも人と大いふ異あり或人いふ多とぶ斯富士山ふ
のゝ數度のがるるふぞと問ふに藤四郎答て曰く世人佛
法と信じて極楽ふ往ん事を願ふもの多へ然ども誰か一
人極楽へゆくを看て來る者あるへ死ての向の支何ぞ多の
あらんや富士と三國ふゝぐ一固の山ふして登るぶ最天ふ
ちかゝ是則ち天上ふ生を得る心地するあり故ゝ富

士の八ゝふ目ふありて夜月の來迎を拜るるに月中ふ三
尊の如來現ずるひ五色の雲ゝかゞやき其尊き事譬んふものの
あらぬ寔ふ極楽といふも爰より外ふあらじと思ひ侍ふ
釋尊の説ひ給ひ極らくハ十万億土の未ふありて凡人のゆき
て拜む支能ハぬ我們が信ずる富士山上の極楽ハ一年ふ一度
づゝ拜ふるとゝ只管富士へ參登ばかりぬ但躬のお
もひあらんに悪人の登山ばかりに忽ち山あを震動し
て時ふよりて人と掴て投ゆゝ去方を知ざるも亦多し
是則ち富士の地獄あり地獄も極楽も這山ふ有て外
ふあらず是皆目前見るところふして証べきに此四ふ吾